

障がい者スポーツの授業実践（第2報）

—体育専攻生を対象に

鈴木淳也

玉川学園・玉川大学
健康・スポーツ科学研究紀要
第17号

障がい者スポーツの授業実践（第2報）

— 体育専攻学生を対象に —

鈴木淳也*

要約

現在、2020年東京大会に向けて、東京都教育委員会だけでなく、他県においても、オリンピック教育・パラリンピック教育推進校が指定され¹⁾、学校教育の中にもオリンピックムーブメントが全国的に広まりつつある。今回は、体育専攻学生を被験者として、昨年と同じプログラムでブラインドゴーグルの体験授業を行った。授業終了後には、アンケートを実施し、将来、体育教員を目指す学生が、障がい者スポーツに対して、どのくらい理解や関心があるのか調査することを目的とした。結果としては、ブラインドゴーグルを体験したことで、日常生活の中において視覚情報の重要性が再認識されるとともに、障がい者スポーツに対する興味関心が高まる傾向が示唆された。

1. はじめに

2016年、オリンピック・パラリンピックの夏季大会が、ブラジルのリオデジャネイロで開催された。日本選手団は、オリンピックでは金メダル12個を含めたメダル41個、パラリンピックでは、金メダル獲得はならなかったがメダル24個と、過去最高の成績を残すことができ、2020年東京大会に向けて弾みがつく大会となった^{2, 3)}。

東京オリンピック・パラリンピック組織委員会では、2020年大会ビジョンとして「すべての人が自己ベストを目指し（全員が自己ベスト）」、「一人ひとりが互いを認め合い（多様性と調和）」、「そして未来につなげよう（未来への継承）」を提唱しており、その中でも、世界中の人々が多様性や調和を大切に、共生社会の実現を目指している⁴⁾。すなわち、2020年東京大会は、東日本大震災の復興大会の位置づけとして、日本の誇る高い技術力や歴史、伝統など、世界に向けて発信する大会としてだけでなく成熟国家として、オリンピックはもちろん、パラリンピックの成功が非常に重要になる。今回のリオデジャネイロパラリンピックにおいては、NHKや民放でも毎日のように生中継で各競技を放送したため、障がい者スポーツに対する国民の注目度も、前回のロンドン大会よりも高まり、学生にとってもパラリンピックの情報を見聞きする機会が増えたと推察される。

そこで本研究では、昨年に引き続き、障がい者ス

ポーツの体験授業を体育専攻学生対象に実施し、視覚障がい者が競泳の試合で使用するブラインドゴーグルを着用して泳いでもらった。また、障がい者スポーツに関するアンケートを行い、将来、体育教員を目指す学生の現状を把握するとともに、今後の授業を改善する一助とすることを目的とした。

2. 方法

被験者は、体育実技（水泳）を履修している体育専攻学生40名（男性19名、女性21名）を対象に行った。今回は、全15週の授業のうち、第10週目にブラインドゴーグルの体験授業を実施した。

授業内容は、表1の通りである。今回は、ノーマルゴーグルで開眼（以後、開眼泳）と閉眼（以後、閉眼泳）の両条件、そしてブラインドゴーグルの3つの条件下で泳ぎ、視界が無くなる影響や感覚の違いについて体験してもらった。練習内容は、昨年とほぼ同じ内容で、歩行、板付きキック、板なしキック、クロール泳をグループ学習させ、安全面に配慮しながら段階を踏んで練習させた。授業の前後では、3つの条件下で15mクロール泳を行い、条件の違いでどれくらい蛇行するか調査した（写真1）。また、授業後は、障がい者スポーツに関する理解や認知度など、昨年から一部変更したアンケートを実施した。

統計処理は、SPSS Statistics 21とMicrosoft Excel 2013を用いて行った。15mクロール泳で3つ

* 玉川大学教育学部

表1 授業の流れ

時間	指導内容	指導方法
0:00	本時の内容 点呼・体操	・本日の授業の流れを説明。また、障がい者スポーツ（水泳）のカテゴリーや視覚障がい者が競技会で使用するブラインドゴーグル、タッピング棒の説明。
0:10	W-up 開眼泳（15m×1本）	・各自で W-up。その後、15mをノーマルゴーグル（開眼）で泳ぎ、どれくらい蛇行するか泳力調査。
0:20	・歩行 ・板付きキック ・板なしキック ・クロール	3つの条件下で左記練習を実施する。 ①ノーマルゴーグル（開眼）、②ノーマルゴーグル（閉眼） ③ブラインドゴーグル ・ペアの学生が、方向の指示や他の学生にぶつからないよう、支援させる。 ・クロールは、キャッチアップクロールでゆっくりしたスピードで始め、徐々に泳速度を上げる。5～6名のグループに分け、お互いに協力しながら練習を進める。
0:40	泳力調査 閉眼泳 ブラインドゴーグル （15m×1本ずつ）	・ノーマルゴーグル（閉眼）とブラインドゴーグルの条件で15mクロールを泳ぎ、視界がない状態でどれくらい蛇行するか、開眼時との感覚の違いを体験させる。 ・ゴールタッチは、タッピング棒の合図で止まるように指示する。
1:10	アンケート調査	・障がい者スポーツの理解や認知度に関するアンケートを行う。

の条件ごと蛇行した距離の比較は、対応のある一要因分散分析を用いた。また、アンケート調査は、適合度の検定を行った。なお、統計の有意水準は5%とした。

3. 結果・考察

(1) 障がい者スポーツの認知度と経験

表2は、障がい者スポーツに関する認知度と経験に関するアンケート結果である。「障がい者スポーツ」と「パラリンピック」の言葉は、100%とすべての学生が知っていたが、「アダプテッド・スポーツ」は0%と誰も知らなかった。障がい者スポーツの経験は、「障がい者スポーツを見たことがある」が62.5%、「障がい者スポーツを行ったことがある」が10%、「障がい者水泳を見たことがある」が20%であった。障がい者スポーツに関する言葉の認知度は、「障がい者スポーツ」、「パラリンピック」ともに、2020年大会に向けて、現在、多くの場所で見聞きする機会があり、学生にとっても馴染みのある言葉であったと考えられる。一方、「アダプテッド・スポーツ」は、体育の授業科目として開講している大学もあるが、

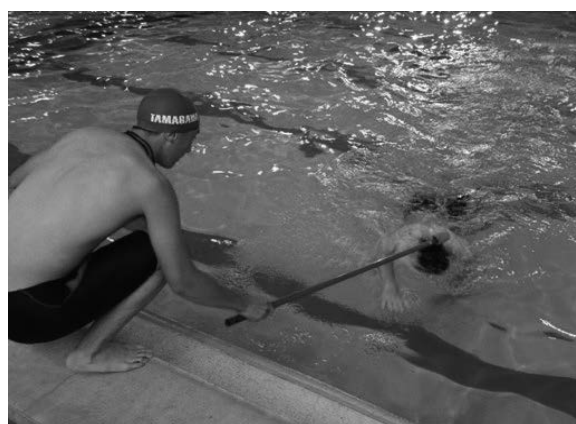


写真1 授業風景（上：グループワーク、下：泳力調査）

永浜⁵⁾の報告と同様に、学生が聞いたことがない言葉であった。

障がい者スポーツの経験は、昨年の一般学生とあまり変わらず、低い値を示した⁶⁾。アンケート調査した時期は、2016年9月にリオデジャネイロパラリンピックを控え、多くのメディアで障がい者スポーツの競技や選手がテレビなどに上げられていたため、学生に情報が入りやすい環境であったと考えられるが、それほど数値には反映されなかった。表3は、障がい者スポーツをこれまで見たことや体験したことがある種目、今後、授業で体験したい種目

をまとめたものである。結果としては、車いすバスケットボールやサッカーといったメディアに比較的多く取り上げられる種目が多くみられた。

(2) 開眼泳、閉眼泳、ブラインドゴーグル条件における泳ぎへの影響

表4は、閉眼泳とブラインドゴーグルの条件下での恐怖心に関する項目である。閉眼泳では、57.5%、ブラインドゴーグル着用時は、85%と多くの学生が恐怖を感じながら泳いでいた。図1は、3つの条件下で15mクロール泳を泳いだ際、どれだけ蛇行したか

表2 障がい者スポーツの認知度と経験に関する項目

設問	「はい」		「いいえ」		X ² 検定
	N	%	N	%	
(1)「障がい者スポーツ」という言葉を知っていますか。	40	100	0	0	
(2)「パラリンピック」という言葉を知っていますか。	40	100	0	0	
(3)「アダプテッド・スポーツ」という言葉を知っていますか。	0	0	40	100	
(4)障がい者スポーツを見たことはありますか。	25	62.5	15	37.5	
(5)障がい者スポーツを行ったことはありますか。	4	10	36	90	**
(6)あなたは、障がい者水泳を見たことはありますか。	8	20	32	80	**

*p<0.05, **p<0.01

表3 障がい者スポーツを経験したことがある種目と体験したい種目

見たことがある種目 (n=25)		体験したことがある種目 (n=4)		今後、授業で体験したい種目 (n=31)	
車いすバスケットボール	19	水泳	2	車いすバスケットボール	16
陸上(マラソン含む)	11	車いすバスケ	2	サッカー	9
サッカー	9	歩行	1	車いすテニス	5
車いすテニス	8	サッカー	1	陸上	4
水泳	6			車いすの種目	2
野球	2			水泳	1
車いすラグビー	1			車いすラグビー	1
トライアスロン	1			野球	1
				体操	1

表4 ブラインドゴーグルならびに閉眼泳の恐怖心に関する項目

設問	「はい」		「いいえ」		X ² 検定
	N	%	N	%	
(7)あなたは、ブラインドゴーグルをつけて泳いだ際、恐怖心がありましたか。	34	85	6	15	**
(8)あなたは、閉眼で泳いだ際、恐怖心がありましたか。	23	57.5	17	42.5	

*p<0.05, **p<0.01

表6 視覚障がい者への対応と大学授業に障がい者スポーツを導入することに関する項目

設問	「はい」		「いいえ」		X ² 検定
	N	%	N	%	
(13)あなたは、視覚障がい者に接したことはありますか。	8	20	32	80	**
(14)今後、視覚障がい者に出会った際、何かしら支援したいと思いますか。	40	100	0	0	
(15)今後、大学の授業で障がい者スポーツを経験したいと思いますか。	31	77.5	9	22.5	**
(16)今後、大学の授業で障がい者スポーツについて、学習したいと思いますか。	38	95	2	5	**

*p<0.05, **p<0.01

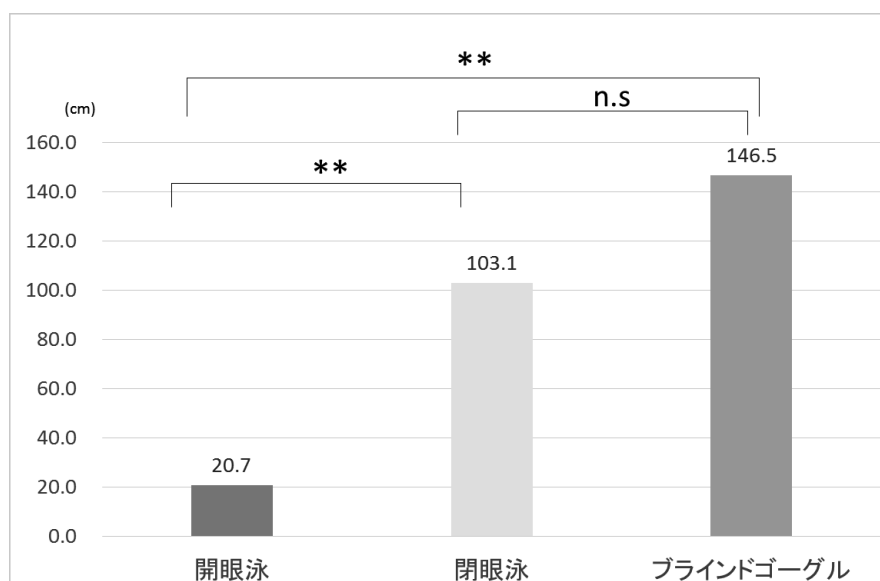


図1 3つの条件下における15mクロール泳の蛇行した距離

示したものである。15mクロール泳で蛇行した距離は、開眼泳 20.7 cm、閉眼泳 103.1 cm、ブラインドゴーグル 146.5 cmの誤差であり、開眼泳と閉眼泳、開眼泳とブラインドゴーグルには有意な差が認められた ($p < 0.01$)。体育専攻学生は、昨年の被験者であった一般学生と同様、ブラインドゴーグルを着用して15mクロールを泳いだ際、大きく曲がる傾向がみられた。

今回の実験では、閉眼泳を条件に追加し、ブラインドゴーグルとの感覚の違いを検証した。実験後のブラインドゴーグルの内省報告では、「いざという時に開眼できない恐怖と本当の暗さに恐怖を感じた。」「ブラインドゴーグルは、光が全く感じられず真っ暗で、平衡感覚も無くなった。」などの記述が多くみられた。閉眼泳の内省報告では、「閉眼時で泳いだ際に、光が入ってくることによって恐怖心が少し減った。」「閉眼時は、普段と泳いでいるのときほど変わらず、すぐ目を開ければ見られる安心感があった。」といった意見が多くみられた。

ブラインドゴーグルは、真っ黒にレンズが塗られており、光を通すことはない。学生にとっては、日常生活で体験しない感覚であったため、閉眼泳より恐怖心を強く抱いたことが考えられる。また、

閉眼泳では、周囲の明るさがあり、いざとなったら目を開けることができる安心感があったため、恐怖心はその分軽減し、普段のリズムでクロールを泳ぐことができたと考えられる。

(3) オリンピックとパラリンピックに対するイメージの違い

表5は、学生にとってオリンピックとパラリンピックのイメージの違いを記述してもらい、まとめたものである。オリンピックは「健常者」、パラリンピックは「障がい者」が出場する大会といったように、参加者の違いに関するコメントがみられた。また、パラリンピックは、メディアの取り上げ方がオリンピックよりも少なく、その影響もあって国民の関心や注目度が低いといったもの、障がいの程度で種目やルールが異なる点などの記述も多くみられた。

一方で、オリンピックとパラリンピックともに「競技に全力で取り組む姿勢は変わらない」といった同じイメージを持っている学生も少数であるが見られた。

今回の結果からも、パラリンピックに関しては、マイナスイメージを持っている学生が多くみられた。学生の中には、「このような環境を改善するた

めには、障がい者スポーツを知り、理解することが必要である。」「日本では障害者スポーツが普及していないからであり、日本全体で変えていかないといけない。」と述べていた。今後、2020年大会に向けて障がい者スポーツに触れる場を学校教育の中で増やしていくことが、「障がい者」に対する学生の意識や行動を変容させるためにも重要であろう。

(4) 今後の課題

今回の研究において、大学生は障がい者スポーツに関する言葉の理解度は高かった。一方で、パラリンピックについては、偏った見方や考え方をしていること、それにはメディアの影響が関与している傾向が示唆された。今後も、授業の中で、様々な障がい者スポーツを体験させたり、講義を通してパラリンピックの歴史や種目、ルールなどを学習させたりする場を充実させ、学生には多角的に障がい者スポーツを見る目を身に付けさせることが重要であろう。さらに、競泳パラリンピック代表の木村が言うように、実際に障がい者スポーツの競技会を生で観戦し、選手と交流するような環境が増えると、より「障がい者」への理解力が高まると考えられる⁷⁾。今後、2020年東京大会に向けて、障がい者スポーツが普及していけるよう、さらに授業実践、調査を進めていきたい。

	すべての人（障がい者も含め）が参加できる大会である
	障がいのない選手がやる大会
	健常者が出るもの
	誰でも参加できる違い
	観戦する人が多く選手も有名なイメージがある
	TVでも多く放送され、注目されている。
<オリンピック>	テレビで大々的に放送される
	オリンピックは、テレビなどで放送される
	オリンピックの方は感心が強い
	オリンピックの方が、盛り上がる
	オリンピックは、みんなが盛り上がる
	自分たちはオリンピックの方が身近に感じる。
	オリンピックの方が注目度や予算などが高い。
	障がいの持っている人のみ参加できる大会である
	どこかしら、怪我などで足や手が不自由である選手の大会
	パラリンピックは、障がい者がでるもの
	パラリンピックは体に少しでも障害がある方がやるもの
	テレビでそんなに放送されないイメージ
	パラリンピックがテレビで放送されているのをあまり見ない
	なかなかテレビや新聞などのメディアには取り上げられることは少ない
	メディアの取り上げや観客数も少ないイメージ
	パラリンピックは注目度が低い
	パラリンピックは少し盛り上がりかけるイメージ
<パラリンピック>	パラリンピックの認知度が低い
	パラリンピックオリジナルの種目がある
	オリンピックと同じ種目でもルールが異なり、特別であるイメージ
	パラリンピックは種目が少ないイメージがある
	障がいの程度ごとに種目があるので種類が多く分かつらいイメージ。
	オリンピック開催後に、同都市でパラリンピックを行うイメージ
	管轄している省庁が異なる
	競技のサポートや運営に関わる人がより多く必要で、コストが多くかかりそう
	パラリンピックは多くの子供たちに勇気を与えられるイメージ
	トップ選手に辿りつくまでは、ハンデを背負っている人の方が凄みを感じる面がある
	障がい者スポーツを見ていると、元気を与えてくれる
	エンブレムが2つで違う
	どちらもすごく感動的で興味を引く
	パラリンピックもオリンピック同様、奥が深く競技にかける思いは変わらない
<その他>	2つのイメージに違いはない
	どちらも、アスリートと呼ぶにふさわしい人間が競技を行っている
	オリンピックもパラリンピックも一流のアスリートが国を背負って出場する大会
	金メダルを取る、勝利を収めるなど、目指しているところや気持ちは同じ
	スポーツに一生懸命取り組み、その道を極めていることは同じである

表5 オリンピックとパラリンピックのイメージの違い

4. まとめ

今回の研究は、体育実技（水泳）を履修している体育専攻学生を対象に、ブラインドゴーグルを使用した体験授業を実施することで、障がい者スポーツに対する認知度や理解度を調査することを目的とした。結果は、以下の通りである。

1) 障がい者スポーツに関する言葉の理解度は、

「障がい者スポーツ」と「パラリンピック」の言葉は、100%で知っていたが、「アダプテッド・スポーツ」は0%と学生は誰も知らなかった。

2) 障がい者スポーツの経験は、「障がい者スポーツを見たことがある」が62.5%、「障がい者スポーツを行ったことがある」が10%、「障がい者水泳をみたことがある」が20%と、体育専攻学生であっても、昨年的一般学生とあまり変わらない数値であった。

3) ブラインドゴーグル着用時は、体育専攻学生でも大きく蛇行した。その理由として、ブラインドゴーグルは、光が全くなく視界が遮られることで、閉眼泳よりも恐怖心や平衡感覚が鈍る意見が多く聞かれた。

4) 大学の授業で障がい者スポーツを体験、学習したい学生が多くみられ、今後、2020年東京大会に向けて、「障がい者」に対する意識や行動が変容していくような授業を実践していきたい。

参考文献

- 1) 茨城県教育委員会 HP :
<http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/topics/news/photo/h28/10/1020.html> (2017/2/6)
- 2) 公益財団法人日本オリンピック委員会 HP :
<http://www.joc.or.jp/games/olympic/riodejaneiro/japan/winnerslist/> (2017/2/6)
- 3) 日本パラリンピック委員会 HP :
<http://www.jsad.or.jp/paralympic/rio/index.html> (2017/2/6)
- 4) 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 HP :
<https://tokyo2020.jp/jp/games/vision/> (2017/2/6)
- 5) 永浜明子：「「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル-アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第Ⅲ報)-」、大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門 61(2)、2013年、pp47-60
- 6) 鈴木淳也：障がい者スポーツの授業実践-ブラインドゴーグルを体験して-、玉川学園・玉川大学健康・スポーツ科学研究紀要 16、2016年、pp13-21
- 7) 玉川大学・玉川学園 HP：教育レポート
玉川教育学部健康教育研究センター主催のシンポジウム、「パラリンピアンが思い描く東京2020」
http://www.tamagawa.jp/education/report/detail_11654.html (2017/2/10)